

法談者としての Mahāmoggallāna

—— 經典内容の改変・増広の一例 ——

竹井良憲

原始經典の中には、弟子たちが意見を述べ合っている經典が存在する。特に有名な經典は中部第32經(以下 MN. 32 と略す)の Mahāgosingasutta³ である。この經典では六人の大弟子たちが登場し「Gosingasālavana を輝かすのはどのような比丘か」について意見を述べ合っている。つまり、比丘の理想像について語り合っているのである。六人の意見を要約して記すと次のとおりである。

Ānanda……多聞でよく持し、四衆に法を説く比丘。

Revata……独坐を愛好し、心が安定し、禪定を軽視せず、觀を成就し、空閑処の専修者たる比丘。

Anuruddha……清浄で超人的な天眼により千世界を見る比丘。

Mahākassapa……頭陀行者であり、戒・定・慧・解脱・解脱智を見を具足した比丘。

Mahāmoggallāna……二人で相互に質問し解答して、法についての談 (abhidhammakatha) をなす比丘。

Sāriputta……心を征服し、心によって征服されず、いつでもいかなる住にも住することができる比丘。

漢訳相當經の中阿含一八四經(以下、中一八四と略す)牛角婆羅林經³は大筋においてパーリの MN. 32 と一致するが、大迦旃延

(Mahākaccāyana) を加えた七人の大弟子たちが登場して意見を述べづる。しかも、大目犍連 (Mahāmoggallāna) の意見内容が MN. 32 と異なっており、大迦旃延の意見は MN. 32 の Mahāmoggallāna の意見にほぼ一致している。この兩名の意見を要約すると次のとおりである。

大目犍連……大如意足・大威神を有する比丘。

大迦旃延……二人で阿毘曇を論ずる比丘。

もう一つの漢訳相當經、増一阿含三七・三³(以下、増三七・三と略す)は、登場人物については MN. 32 と一致し、大迦旃延は登場していない。しかし、意見内容に関しては、目連 (Mahāmoggallāna) のみ MN. 32 と異なる。目連の意見を要約すれば次のとおりである。

目連……大神足を有し、神足に於て自在を得たる比丘。

以上のように、登場人物と Mahāmoggallāna の意見内容とに関して、三經に相違がみられるのである。この点について宇井伯壽博士は、(1) 仏弟子中では目犍連は神通、大迦旃延は論議とされるのが通常であること、(2) 目犍連が魔や諸神諸天子のところへ行った經が多いこと、(3) 大迦旃延が論議分別に長じていたことを示す經が多いこと、(4) AN. I. 14 で目犍連は神通を有する点、大迦旃延は略説を分別する点で弟子中第一といわれていること、を根拠に挙げて、次のように述べておられる。

故に中部第三十二經は元來は目犍連は神通、大迦旃延は法談を讚嘆したことが述べられて居たのが、遂に大迦旃延の名が逸失せられ、目犍連の下の神通讚嘆の文が失はれて目犍連の名と法談讚嘆の文とが結びくに至ったものなること疑ふ由はないと思ふ。増

一阿含の方は元来大迦旃延の凡てがなかったか又は全く失はれたか何れかのもので、中阿含に比すると一人不足しているが、然しこれだけでも決して其中に何等の誤謬錯雜もないものである。此の如くパーリの錯雜誤謬は明瞭で、経が盲目的な変化を蒙った確証を示して居るが、……

MN. 32 と増三七・三は一致して Mahakaccāyana を登場させていないが、宇井博士の説明によれば、これは偶然の一致ということになる。はたして単なる偶然の一致なのであろうか。

そこで MN. 32 の Mahamoggallāna の意見内容と中一八四の大迦旃延の意見内容を詳しく検討してみたい。

まず MN. 32 の Mahamoggallāna の意見は次のとおり。

友サーリプッタよ、二人の比丘が法についての談をなし、彼らは互いに質問に答えて答えないことがない。そして、彼らの法談は有益である。友サーリプッタよ、このような比丘によってゴーンガサーラ林は輝かされるであらう。

中一八四の大迦旃延の意見は次のとおり。

尊者舎梨子、猶ほ二比丘法師、共に甚深なる阿毘曇を論ずるがごとし、彼の問ふ所の事、善く解し悉く知り、答また無礙にして、説法弁捷なり。尊者舎梨子、是の如き比丘、牛角婆羅林を起発せん。

以上のように、内容はほぼ一致し、(1)二比丘が、(2)法についての談 (abhidhammakatthā 阿毘曇) をなし、(3)相互に問い答えるというのが要点である。では、この意見は Mahamoggallāna と Mahakaccāyana のいずれにふさわしいであろうか。

まず Mahamoggallāna が登場する經典を検討してみよう。MN.

法談者としての Mahamoggallāna (竹井)

69 では Sariputta が諸比丘に説法した後 Mahamoggallāna が Sariputta に質問している。また AN. IV. 167, 168 では Sariputta と Mahamoggallāna が問答をしている。

一方 Mahakaccāyana が登場する經典を調べてみると、彼が他の一比丘と問答したことを記す經典は見あたらない。

以上の点からみて、前述の意見は Mahamoggallāna にこそふさわしいと考えられる。従って、(1)パーリ MN. 32 に記すように、二人で法について問答する比丘を理想像として挙げたのは Mahamoggallāna であり Mahakaccāyana は全く登場しないというのが本来の經典の内容であったと考えられる。(2)増三七・三では「神通第一の目連」という通念に影響されて、目連の部分を、大神足者を理想像とする内容に変更したのであろう。(3)中一八四でも、やはり通念に従って、大目犍連の部分を如意足神通の内容としたのであろう。そして、二比丘が法について問答するのを理想とする部分は、そのまま生かして「分別・論議第一」とされる大迦旃延の名を付したのであろう。

原始經典や律藏においては神通に対する評価は低く、内容的にみても、神通者よりも法談者を理想像とする方が妥当だと思われる。Mahamoggallāna が諸神諸天子のところへ行った經典は多いが、いずれも法談が目的であり、神通はそのための手段にすぎないのである。

- 1 MN. vol. I. p. 212. 2 大正一、七二六下。3 大正二、七一〇下。4 宇井伯壽博士『印度哲学研究』第三、p. 345.
- 5 MN. vol. I. p. 469. 6 AN. vol. II. p. 154, 155.

(東京大学大学院)